

特集 大阪駅北ヤード 再開発の挑戦



最後の「一等地」？ いいえ、
21世紀最初の「一等地」です

●平松邦夫 | ビルだけが林立するまちはありえない。水と緑の「うめきた」に ●大阪市議会5会派(自民・民主・公明・共産・維新の会)アンケート ●宮原秀夫 | 収益構造を持った緑地の提案『UMEDA GREEN』の真意 ●篠崎由紀子 | 「みどり」豊かなオープンスペースを実現しよう ●LY design(都市環境ランドスケープ+安井建築設計事務所)の提案内容とは? ●鳴海邦碩 | 国際コンペの精神どこへ。市は本来の役割果たすべき ●芦澤竜一 | 施工から市民がかかわる機会を。参加によって愛着が深まる ●近藤英夫 | 人材の流入によって多様性が生まれることに期待 ●浜田容子 | 市民の希望は、自由に使える「公園」的な場所 ●山崎 亮 | 事業者の特定はマネジメントのアイデアを見極めて



緑地として必要な量をしっかりと確保されるよう決断を迫ることになります。市としても、できるだけ多くの緑を配置したプランが優先されるように誘導したいと考えています(平松邦夫 大阪市長)。

コンペでは、公開空地のマネジメントとセットで抜群の意見を出した事業者に特定するためのフレームづくりが重要です。結果的に、量的な緑の整備で終わってはいりません(山崎亮)。

①=JR大阪駅の北に広がる開発区域「北ヤード(通称うめきた)」 ②=「Green River」LY design(都市環境ランドスケープ+安井建築設計事務所) ③=「都市の庭」大阪から発信する民有公共の庭 京都造形芸術大学大学院 [提供:関西経済同友会]



ジャーナルギャラリー |
「集まって住む、
を考え直す」
=成瀬友梨+猪熊純
門脇耕三

各地域に拠点を置く設計事務所
作品集
建築集

美しき構造設計の世界②③
「広島子供の家」
大野博史

官業癒着、談合体質の
改善・改革を求めて
岐阜市議が決意の訴え

生鮮市場もコスト優先か!
築地市場は日本の誇り
小槻義夫

納見健悟
論評

実務者のための
「マネジメント」
ブックガイド

新連載

グリーン建築推進協議会 東北地方太平洋沖地震への義捐金募集

「東北地方太平洋沖地震」の支援活動が広がりを見せている中、建築界ではいち早く、「グリーン建築推進協議会」(井上幸一会長)が、義捐金の募集を発表した。義捐金は、被災地にある宮城県古民家再生協会、福島県古民家再生協会、岩手県伝統的質材再生機構の3団体へ3分割する。募集期間は4月29日(月)まで。振込先は①郵便局口座(記号16140、番号22438571、口座名200年住宅再生ネットワーク機構事務局)、②郵便局以外の金融機関から振込む場合(店名六一八、店番618、普通預金、口座番号2243857、口座名200年住宅再生ネットワーク機構事務局)。同協議会は、中期的に「支援物資を集めて提供」、長期的に「建築物の調査支援」を実施する予定だ。問合せ:200年住宅再生ネットワーク機構事務局 TEL0120-923-043。

第24回村野藤吾賞に仙田満氏の「国際教養大学図書館棟」に

村野藤吾記念会(谷口吉生代表)は、3月15日、第24回村野藤吾賞の受賞者・作品に、仙田満氏(環境デザイン研究所)が設計した「国際教養大学図書館棟」を選定した。

図書館は、中心部に直径30cmの秋田杉丸太柱6本が上部に開いて立ち上がり、そこから放射状に梁が11mのスパンで半円形傘状に伸びる。さらに8.5mの半円形平面が奥まで続き、壁面は開口部以外すべて書架だ。本を探して館内を巡りながら、それぞれが好む場所で閲覧できる「書齋の集合体のような理想的な読書空間」と評価された。

受賞式・記念講演会は5月16日13時30分から、東京の目黒区総合庁舎で開かれる。入場無料。事前申込みが必要。問合せ:同記念会事務局(建築情報システム研究所内、TEL03-3561-4641)

渡辺洋司設計の「軍艦マンション」リノベーションジャンルを超えた35組のクリエイターが占拠!?

建物幅140m(奥行50m)、シルバーに塗られた躯体、横置きされた給水塔など特徴ある外観を持つ「軍艦マンション」(東京都新宿区)が再出航する運びとなった。

ビルの正式名称は「旧第3スカイビル」。1970年竣工、地上14階、地下1階建ての建物だ。設計は「狂気の建築家」とも呼ばれていた渡辺洋治(1923-1983)。陸軍船舶兵出身という経歴を持ち、その影響がうかがえる独特のデザインの建築物をいくつも手がけている。



軍艦マンションの外観

2011年、解体も検討された軍艦マンションだが、「GUNKAN東新宿ビル」として再生。オフィス、シェアSOHO、シェアハウスとフロアによって用途を分け、入居者を募集している。

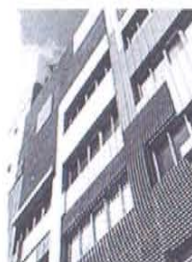
4月中旬の入居開始に先立ち、2月22日から27日まで、内覧会を兼ねた再出航イベントが開かれ、35組のクリエイターが作品を

木製外装材はヒートアイランド対策に効果大 国産材と都市環境シンポジウム

国産材をテーマにしたシンポジウムは近年頻りに開かれるが、2月23日、砂防会館別館(東京・千代田)で行われた「国産材と都市環境シンポジウム」は、ヒートアイランドと国産材の利用とテーマを絞ったものだ。

シンポジウムを主催した「国産材を活用したヒートアイランド対策協議会」は、大阪府や大学、民間企業など産学官が一体となって、間伐材を利用して都市部のヒートアイランドに役立てようと呼びかけ、昨年4月発足した。

同協議会は、大阪府立大学屋上にウッドデッキを、大阪木材会館(既存)の外壁に間伐材パネルを張り、木材によるヒートアイランド対策を調査した結果、日中、木質パネルの表面は高温になっても、夜間放熱が低減する効果が確認された。夜対策(空調負荷の低減)につながることもわかった。外装材に使用する木材はスノキなどの間伐材だが、200℃前後の加熱処理を行うため、防腐性(ノンケミカル化)、寸法安定、低熱伝導率の効果があるという。興味深いのは、屋上緑化よりも20%の効果が高いことだ。水野稔大阪大学名誉教授は「現代都市はアスファルト、コンクリート、ガラスなどの多用で、熱代謝機能が働かず、夏期の住宅環境は悪化している。都市部では緑地や水面も消失されているだけに、ビルの外装に間伐材を張り、ヒートアイランドを抑えてほしい」と話した。



積層張り、ルーバー、鍍金などさまざまな手立てで木質パネルを張った木材館

写真展「アフガニスタンの大地と子どもたち」 会場構成は安齋哲さん(HOUSE OF TOMORROW)

小麦、葡萄などの収穫に笑顔を見せるアフガニスタンの人や子どもたちの写真が所狭しと飾られ、写真を展覧する来場者に、アフガニスタンで農業支援や灌漑用水路建設などの活動をしてきた進藤陽一郎さんが説明を加える。2月25日から27日の3日間、今小路クラブ(鎌倉市西口より徒歩5分)で開かれた写真のようすだ。「2008年8月26日、アフガニスタンで復興支援を続け、凶弾に斃れた伊藤和也さんへの思いと、伊藤さんの日線(人生)を通して、生きにくさを感じている人々に心の旅を届けられれば」と、主催者の佐川曜子さんが写真展の意図を話してくれた。

会場となった今小路クラブは、木造アパートの一室を「地域の居間」として開放され、今回の写真展では建築家・照明デザイナーの安齋哲(HOUSE OF TOMORROW)が会場構成を担当した。スペース、予算ともに限られた会場はベニヤを用いた素朴な構成だが、「アフガニスタンを緑豊かな国に戻すお手伝い子どもたちが将来、食べ物に困らないように」と「ベジャワール会」の現地ワーカーとしてきた伊藤和也さんの思いと重なった。



進藤陽一郎さんは2008年までアフガニスタンで活動し、現在は国内で林業に従事している

健康な住まいとは何か ドイツ・バウビオロギー建築の手法を学ぶ

バウビオロギーとは、バウ(建築・居住)、ビオ(生命)、ロゴス(多様な意味:言葉・理性)の造語であり、簡単にいえば、建築生物学、生態学である。新材材による健康被害がきっかけとなり、1970年代、ドイツで始まった建築運動は諸国に広がり、日本では2005年3月、日本バウビオロギー研究会が発足した。

3月3日、同研究会主催によるセミナー「ドイツ・バウビオロギー建築の手法を学ぶ」が東京都内で開かれた。ドイツ公認建築家のヴォルフガング・ブランク氏を講師に迎え、ホルステックに建て、住まうための方法論を話した。とくに、建材の有害物質や放射能の危険な磁気環境のリスクを強く訴え、「眠りの質を確保するために、寝室にはテレビ、パソコンなどの家電製品を置かないこと。ベッドも金属類だと直流磁場を発生しやすい」と忠告した。ブランク氏は「伝統的な日本家屋は、自然換気、自然素材、そして簡素さがある。ガラスと鉄でできたオフィス建築との相違を感じてほしい」と叫ぶように、ホルスティックな建築づくりは、伝統的民家や日本の建築史に学ぶべき



黄金比を用いた美しいプロポーションで建物をつくってほしいとも話した。左は通訳を務めた石橋工科大学大学院准教授